



広島市シニア大学

自治会だより

第55号

(令和4年11月24日)



編集/発行 大学自治会 文化部 平成28年6月創刊

『取り戻したぞ！笑顔と絆の大学祭！』

3年ぶりのシニア大学祭が、無事事故もなく開催され、成功裏に終わりました。

まずはご指導ご支援頂いた、広島市社会福祉協議会、OB会の皆様方に御礼申し上げます。そして主役の学生の皆さんの頑張りには感動さえ覚えました、有難うございます。

今年は、「新しい大学祭」を皆で創り出すという意気込みでスタートしました。執行部も当初は中々の確な方針が出せず、皆さんにご心労をおかけしました。しかし各系の皆さんが、一致団結諸先輩の意見を聞きながら、自主的に作業内容見直し、体制作り、工程等を作り上げられ結果素晴らしい大学祭として結実しました。その過程で、多くを学ばれ人間関係、絆が出来たことも成果です。

三年前に比べ学生は100名減っています何故か。コロナも有ります、大学生活が大学祭を始め楽しいことが沢山あると、この2年胸を張って言えなかったからではないでしょうか。その点今年の大学祭は、参加出来なかった学生さんや、来年入学される皆さんへの強力なメッセージになったと確信しています。(広島市シニア大学祭実行委員会 実行委員長 川本富士夫)

◎総務係は、七班（本部詰、受付、救急・救護、表示物作成、プログラム作成、警備・防災、飾り付け・調度）に分かれて準備して進めましたが、大学祭各系の潤滑油的な役割を十分に果たすことができました。



◎販売係は、福祉事業所で作られたクッキーや「さをり織小物」、中四国の名産品・特産品を販売しましたが、ちらしなどの販売促進策も効果を発揮して、売上は目標の2倍を達成しました。前回と違って、オープンな場所ではなく会議室で販売したために混雑を心配しましたが、問題無く全品売り切ることでできました。

◎食堂係は、5階の料理教室と団体交流スペースを使ったお菓子付きコーヒーの提供に特化しましたが、学生の皆さんへの事前のお願いや適切な管内放送も効果があって、昼休み時間に混雑することもなく、ゆっくりと利用していただけました。400人近い利用者で、予想以上の売上をあげることができました。

◎バザー係は、合計1400点の品物を寄贈いただきました。前回より少し短い1日半で販売するので、混雑を避けるために、従来の経験を踏まえて、販売室内の定員を少な目に抑えて、一定時間毎に購買者を補充する方式としました。開始直後だけは混雑しましたが、延べ200人の来場者の方々には喜んでいただけました。



◎設営係は、今回はプレ大学祭用の舞台設置や喫食場所周辺へのブルーシート設置などの複雑な作業は少なく、テーブルや椅子などの移動と掲示用器具の準備が主作業だったものの、少人数の要員しか確保できないため配員に苦勞しましたが、準備も復旧もスムーズでした。

◎作品係は、各サークル（絵画、パソコン、書道、水墨画、俳句）及び絵手紙同好会に対し、事前に希望の展示作品を募集しました。その結果、展示作品の合計が373点となりました。大学祭当日では、各サークル（同好会）メンバーが各会議室、2階通路の壁面に展示した力作に対し、芸能企画の合間に多くの方が見学され、各作品の作者に対し、熱心に質問をされている姿がありました。



◎芸能係は、規模縮小の影響で十分な音響設備が準備できなかったため、音響関係で色々と苦勞しましたが、詳しい方のアドバイスもあり、トラブル無く乗り切れました。各班の合唱は、華やかさは減ったものの、全員が落ち着いて楽しんでいました。特別招待の「ライトボイス」の弾き語りも好評でした。



◎写真係は皆様の大学祭で活躍される姿をよりよく記録する為、写真提供のスタイルを、従来の単独販売から、各班、及び各サークル独自の創作アルバム形式に替えます。集合写真がメインとなりますので、ご協力ください。A4版100円で、写真も8枚前後になり格安提供です。

第41回障害子どもまつりにボランティア参加

秋分の日9月23日に開催された「第41回障害子どもまつり」に、理事を中心としてボランティア参加しました。南区民文化センターで、コンサートと作品展が開催されました。立ちっぱなしの一人作業の人からは悲鳴も聞こえましたが、出番を終えて出てきた子供達の「上手くできた！」と満足気な表情をみたら、疲れが吹き飛びました。



混声合唱団サークル活動報告



シニア大学混声合唱団は、9月17日に広島流川教会で開催された「ジョイントコンサート～絆と感謝～」に参加しました。「僕らの軌跡」「大地讃頌」、「群青」の3曲を歌い、最後にほかの合唱団と一緒に「糸」を合唱しました。また、10月16日に安芸区民文化センターホールで開催された「広島県合唱フェスティバル2022」にも参加しましたが、主催者の朝日新聞社を始めとする報道各社ばかりでなく、声楽家や作曲家などの専門家の皆様からも、非常に高い評価をいただきました。